

所に碇泊していたので、他の船が機関銃で応戦していたが、二時間位して敵機は一斉に帰還した』と記録している。

そして、星空の下で眠りつくが、今日の戦闘状況が臉に焼き付いてなかなか眠れない。

敵のサイパン島上陸により、皆が追い詰められた所は谷間であった。集結した人員、二千人以上と思われる程であったという。生き残った者にとって、水と食料と、どのように生きるか。

通信機関が途絶え、七月七日、サイパン島守備隊は全滅した。

ベララベラ島戦記

京都府 矢野 英雄

昭和十六（一九四一）年五月十日、海軍志願兵として舞鶴海兵団入団、昭和十六年八月末、舞鶴鎮守府第一特別陸戦隊として海南島勤務を経て、館山海軍砲術学校対空砲科を卒業後、舞鶴海兵団第四分隊に入隊、昭和十八年二月、呉・舞鶴両鎮守府合同で呉第七特別陸戦隊が編成され、その戦車隊員として参加する。

そして館山海軍砲術学校に陸戦隊員全員が集結し、後、陸戦訓練を受け、昭和十八年四月、中部ソロモン群島方面に展開する。

さらに戦局重大化のため、軍港呉港より戦艦「榛名」「金剛」に分乗、トラック島を経てラバウルに上陸する。ここで連日訓練を重ねながら待機する。

昭和十八年四月末、この頃制海権はすでにアメリカ軍にあり、呉七特全部隊の行動は制約され、

数次に別れてサントイサベル島へ進出する。しかし第一中隊一部に戦車隊等はイサベル島への進出は不可能となり、昭和十八年七月初め、残留部隊は駆逐艦にてブーゲンビル島ブイに進出した。

昭和十八年八月、ベララベラ島ビロアに米軍六千人上陸す、との報により、ベラ島に米軍飛行場の建設を恐れた我が上層部はこれを阻止するため急遽、陸軍より二個中隊、海軍より一個中隊、総勢五百八十人をベラ島に上陸させる。私も十三ミリ対空機銃の射手として、同島に上陸するも、六千人対六百人では、圧倒的な兵力差と敵火力の前に悪戦苦闘を重ねた。

本部からの補給も全くなく、食糧弾薬も尽き、海軍艦隊司令部も、陸軍第十七方面軍司令部も、ベララベラ部隊玉砕やむなしと決定、昭和十八年十月五日頃、陸軍第十七方面軍司令官、海軍第八艦隊司令長官より「最後の一人に至るまで全力を大君に捧げ、皇国武人の榮譽を全うせよ」と玉砕

命令が発せられた。私達は見殺しだと隊員達に動揺が走る。兵達は十日余り一粒の米も口にしていない。落下している椰子の実が貴重な食糧である。全員戦死を覚悟する。

昭和十八年十月五日、中部ソロモン群島の撤退作戦、ムンダ島、コロバンガラ島の将兵一万有余が成功裡にブーゲンビル島に撤退した事により、玉砕命令が発せられていた私達のベララベラ島兵士も、八月七日の暗夜の撤退作戦により無事ブイン海岸に引き揚げる事ができた。長官より「諸君の働きは上聞に達し、御下賜の煙草を賜っている。長期にわたり御苦労でした」とのねぎらいの言葉があり、ベララベラ隊は解散、原隊に帰る。そこでようやく米の飯を口にすることができた。

昭和十八年十月中旬、高射機銃小隊、第一中隊第三小隊、速射砲隊がモノ島に進出するも、十月三十日、玉砕する。この頃、ブイン山対空砲台の十三ミリ対空機銃隊は陣地直撃弾で七人全員戦死

する。

昭和十八年十月末、チイセル島中部に米軍上陸の報により、我が部隊より予備少尉を隊長として一個小隊がチイセル島バンバタに探敵のため出動するも全滅。指揮官と兵曹長の小隊長二人、部下を残し逃げ帰り、敵前逃亡により軍法会議にかけられる。

ベラベラ島より撤退した私達隊員の中で「もしかすると日本に帰れるかも」と言う夢のような話が囁かれていたがとんでもない。減量になってはいるものの三度三度の米飯のおかげで体力も少しずつ快復し、私達にはチイセル島に進出せよとの命令が出た。

昭和十八年十一月末、またまた上陸用大発に食糧その他物資と共に乗船、夜を待って闇夜の中を幸いにも敵魚雷艇との遭遇もなく、チイセル湾に突入、ただちに上陸、積載物をジャングルに隠し、大発艇をマングローブの木蔭に退避させ、夜が明

けきらぬ内に行動を開始した。

一時間程ジャングルの獣道を行くと、深いジャングルの中に司令以下第一中隊が布陣していた。ばらばらになっていた第一、第二中隊がようやく合流できた。新任の呉七特別戦隊司令が出迎えてくれた。初代司令、二代目司令官も負傷のため、三代目の新司令官である。この新司令官が戦争恐怖症となり、部下の将兵は悲惨な苦勞を負わされることとなる。

チイセル島に上陸以来、敵駆逐艦、魚雷艇等の砲撃を受けるも損害はなく、昭和十九年を迎える。

この頃より司令官の奇行が目につくようになる。敵機の爆音が近づくと兵隊たちに「コラ、動くな！動くな」と怒鳴り散らし、我が身はいち早く退避、連日のごとく副官以下の士官達を革ベルトで殴る等異様な行為が目につくようになる。

昭和十九年三月、私達の指揮小隊本部付近は敵艦上爆撃機の猛爆を受け、小隊長以下八人は一片

の肉片を残すだけの壮烈な戦死を遂げた。同時に小隊食糧も全部爆風で飛ばされ、小隊の食糧ゼロとなってしまう。転戦につぐ転戦で、隊員の疲労も体力消耗も激しく、食糧の不足は隊の全体に及んでいた。こうした状況下に、第八艦隊司令部より各部隊に対して「農園を開墾し自活態勢を確立せよ」との命令が発せられるが、農園開墾作業のために警備の手薄となることを極端に恐れた司令は、兵隊を陣地に配置したままとしたため、農園作業に従事した兵は病弱者をのぞくと極めて少なくなつた。

この我が呉第七特別戦隊の自活態勢は大きく立ち遅れ、遂には栄養失調の隊員が続出、加えて熱帯特有の悪性マラリアで戦病死する隊員が日を追うごとに増加する状況となつた。この頃ようやく本隊の位置より二キロ程離れた現住民の焼畑農園付近が開墾され、私達五人（下士官一人に兵隊四人）がイモ苗の作付けと農園の管理のために軽機銃一丁携行で進出の命を新任の小隊長より受け、

開墾された農園に行く。

本部より遠く離れて、ここより南には日本兵は誰一人いない位置にたった五人である。結果はすぐ出た。

昭和十九年十月初め、午前中の作業をすませ、椰子林の中に建てた掘立小屋に帰り、ヤドカリや椰子リンゴ等を飯盒で炊いての昼食である。この頃は食糧は全く無く、椰子の実、パイヤ、山イモ、ヤドカニ、ヘビである。敵襲があれば小銃一丁と共にタコ壺に転げ込む。

「トカゲ」「キノコ」、遠浅の珊瑚礁の海岸で、引き潮時に敵飛行機の爆音に注意しながら小魚や「ウツボ」貝を採り、運がよければ野犬を撃ち殺し、「マムシ」「トカゲ」等は最高の栄養であった。

いつものように昼食を終えて坂本上水は小銃を持って海岸に小魚採りに、残り四人はいつものように色気話は全くなく、ただ天井が食べたいとか

大福餅がうまいなどとたわいない話に夢中になっている。突然数発の銃声を聞いた瞬間、尾崎兵曹は、その場に声も出さずうつ伏せに倒れた。私もとつさに小屋から出て地に伏す瞬間、右手上部に熱いものを感じるも弾が当たった事は気付かない。

「敵襲だ！ 渡辺、木城、坂本」と大声で呼ぶ。

敵弾はプシュプシュと飛んでくる。木城が海岸方面に、渡辺が陣地に掘ったタコ壺から呼んでいる。這伏前進で行こうとするが前に進めない。右手を見ると手がねじれたようになり、血がタラリと流れ、ザクロのように大きく口を開いている。

貫通銃創だが不思議にも痛さは感じない。ただ「やられた」と思っただけだ。渡辺上水も足をやられたのか、大腿部のズボンから血が出ている。敵が来たら首が飛ぶと予感が走る。弾丸は近くにプシュプシュと飛んでくる。敵の声はするがそれ以上は近づいてこない。大きな声で「坂本、渡辺、木城」と繰り返し連呼し、足をやられた渡辺が小銃に弾を込め、私が敵の声のする方向に左手で撃つ。

その繰り返しだ。名前を呼びながら小銃を撃ち応戦する。

突然、敵の方向で、うなるような大きな声があった。途端に銃声が止まった。敵が逃げたのだ。静かになった。タコ壺で渡辺と二人でゲートルを裂き止血していると、渡辺が「駄目です」と言った途端、うなだれてしまった。私は必死に「オーイ渡辺、渡辺」と肩をたたくと、一瞬目を開けるも、またうなだれてしまった。呼んでも呼んでも返事はない。戦死と感じた。静かである。本当に静かになった。付近を見ると尾崎兵曹がうつ伏せに倒れている。渡辺上水はタコ壺の中でもたれている。木城と坂本上水が見当たらない。一人である。再度の敵襲、爆撃と頭の中をよぎると、いいようなない恐怖が走る。焦るが気を取りなおし、本部に報告に行く事を決心、小銃一丁左手にジャングルの中を本部に向かう。

途中、いち早く逃げていた坂本に追いつく。昭和十七年の若い志願兵である。怒る事もできない。

川幅五〇メートルぐらいのワニオリ川に到達する。坂本が泳いで渡り、小隊本部に報告。本部より折畳み式伝馬舟で迎えにきてくれた。夕食を待つて大隊本部に着く。中隊長と軍医長が応急手当の用意をして私を待っていてくれた。中隊長に状況報告後、軍医長の手当を受ける。この頃医薬も底をつき、傷の手当もヨードチンキをベタベタとつけ、板切れを当てるだけの事だった。

翌朝、急遽、一個小隊が現地に索敵のために派遣され、心配していた渡辺、木城上水の二人を担架に乗せて帰って来た。無事だったのだ。三人で互いの無事を悦びあう。話を聞けば、木城上水は足を負傷して気を失っていたが南国特有のスコールに雨曝しとなり、雨にうたれて気がついたと言う。これが本当に九死に一生を得る事だろう。

元気な兵隊でも自分の食糧確保が困難なこの時期、負傷した三人の食べ物付き人の兵隊がつくってくれるものの到底食べられるような物ではな

い。タコの木の中の「茎」、古い椰子の実から採った椰子リング等を飯盒で炊いたもので、うまいとかまずいとかでなく、なにか口に入れなくては死んでしまうのだ。小隊員の中でも一番元気者の三人は、出血大量のあとでもあり、栄養失調症になるのは早かった。

この頃、この病室からも栄養失調のため毎日のように戦病死する兵隊が出るようになって来た。十月の暗夜ブーゲンビル島ブイに連絡便が出航する事になり、私達三人と若干の栄養失調症の兵達に乗船、「ブイ」の残留部隊へ後送される事となる。「ブイ」は農園の開墾が進み、少しは芋が収穫されるようになっていた。病室に数人の栄養失調の病人が入室していた。またこの頃、熱帯地方特有の下肢潰瘍の患者も多く出るようになっていた。

ブインの病室に入室以来、朝と夕食に甘藷が食べられるようになり、また時折、同年兵で海軍砲術学校も一緒に、戦車隊の一号車の池上水長が、

皆には内緒で隠すようにして甘藷を差し入れしてくれ、戦友の有り難さをしみじみと感じた。甘藷は食するもやはり大人の体力を保持するだけの栄養には不足し、衰弱し戦病死する兵が続出する。

毎日寝てばかりでは衰弱して死んでしまうと考え、無理にも起き上がり、杖を頼りに一歩一歩と歩く訓練をすることにした。

毎日毎日これを繰り返して、少し歩けるようになってとジャングルの中を飯盒を下げて「かたつむり」や「木の芽」探しを始める。「とかげ」のような素早いのは到底無理である。とにかく何でも食べる事だ。しかし生甘藷は駄目だった。K上水に、生甘藷は絶対に食べるなど口煩く注意していたのに隠すようにして生甘藷を食べた。

結果はアメーバ赤痢のような猛烈な下痢を起し、別病舎に移され、一晩中うなっていたが、やがて静かになり私達が見に行った所、口、鼻、目にまでも大きな銀蠅が真っ黒になる程たかっていた。本当に哀れな最期である。衛生兵が切り取っ

てくれたK上水の小指を渡边上水と二人で空き缶に入れ、煙が上がりぬように椰子の乾燥コブラで焼いた。これは当時の隊では日常茶飯事だった。

この頃ブーゲンビル島「タロキナ」方面では日本陸軍最強と言われていた熊本の第六師団が悪戦苦闘、いや死闘していたが、じわじわとブイン方面に追い詰められ、昭和二十年五月、ブーゲンビル島決戦態勢が決定した。呉七陸戦隊もチイセル島の全部隊も、ブーゲンビル島「ナカロ」地区に農園を確保しながらジャングル内に塹壕を掘り決戦に備える。半病人や右手が全然曲がらず小銃を持てない私や兵隊は、敵戦車に対し体当たり攻撃する対戦車攻撃隊編成分隊長となり、渡边上水ほか元気に農園作業に従事できぬ兵六人が対戦車地雷、あるいは手榴弾を二つ束ね、連日戦車に突撃する訓練を繰り返していた。

このように緊迫した状況下でも、古い古参の下士官の私達、負傷して行動の不自由な者や、農園

作業にも出られぬ病弱な兵隊達に対しての嫌がらせは目に余るものがあつた。しかし同じ下士官でも最古参の下士官である、耐えるしかないのだ。

昭和二十年八月十六日、私達陣地の上空をいつものごとく敵機が旋回しているが、この日は何か違つた。ジャングルの木すれすれを何度となく旋回している。恐る恐る飛行機を見ると翼に日本降伏と書いてある。そしてビラを散布しながら飛行機は去つて行つた。ビラを見ると「日本無条件降伏」とその状況が細部にわたり書いてある。中隊長も飛んで来た。ビラを見て

「敵の謀略だから敵機が来ても出ぬように」と注意される。

翌日も朝から、日本降伏と書いた飛行機が陣地に飛来し、上空を旋回しながら昨日と同じように「ビラ」を投下散布した。飛行機が去つた後、陣地の兵隊もぞろぞろと出て来て、農園に落ちていくビラを読んでいる。その午後、中隊長が隊員全

員を集合せ日本が無条件降伏した事を報告、詔書を読み上げた。すすり泣きながら聞いている者、泣くのをじつと我慢しながら目を真っ赤にしている者、全員が複雑な心、本当に複雑な心境であつた。負けた悔しさ、戦いが終わり、助かつたと思ふ安堵感、毎日死と隣り合わせだったがもう安心、日本に帰られる等、本当に複雑だつた。

その後全員の武装解除後、豪軍の捕虜となり、マサマサ島集結後、昭和二十一年厳寒の二月、破れ被服を身に纏い祖国日本に帰還した。呉第七特別陸戦隊一千四百の内三百人を数えることはできなかった。部隊は解散、元気な者は早々故郷に帰り、渡辺兵曹ほか私達のような負傷者や病人は一時浦賀病院に入院後、ばらばらになる。

私は国立東京第二病院整形外科病棟に転院、数回の手術を受け、現在の症状まで回復して退院、故郷に帰るも手の不自由のために色々苦勞する。しかしソロモン群島の戦場で体験した苦勞を想え

ば、私にして見れば大したことでなかった。

大正に生まれ、昭和に戦い、今平成に八十一歳で生きる喜びを誰かに伝えたらよいのか。折にふれ想い出す亡き戦友の冥福を祈るのみである。同じ地球上に住み、同じ空気を吸う人間が英知を出し合えば、戦争など起きないと思う。いかなる大義名分があっても戦争は二度としてはならぬと思います。

私達の次の時代に日本傷痍軍人会、戦没遺族会等、こんな会ができぬ日本であってほしいと願っています。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十六年五月十日、海軍志願兵として舞鶴海兵団入団、同年八月、舞鶴鎮守府第一特別陸戦隊として海南島勤務を経て、昭和十八年二月、呉第七特別陸戦隊（呉七特）の戦車隊員として参加し、同年四月、中部ソロモン群島方面に展開する。

当初、ラバウルに待機するが、一部はサンタイサベル島へ、第一中隊一部と戦車隊等は同年七月初め、ブーゲンビル島ブインに進出した。

昭和十八年八月、ベララベラ島に米軍上陸の報により、総勢五百八十人の陸海部隊をベララ島に進攻することとなり、筆者も対空機銃射手として、同島に上陸する。この時の戦闘は苦闘の連続であり、食糧、弾薬も尽き、補給もなく、海軍司令部もベララベラ部隊玉砕やむなしと決定、全員戦死を覚悟する。

しかし筆者たちは、中部ソロモン群島の撤退作戦において、コロンバンガラ島などの将兵一万有余が成功裡にブーゲンビル島に撤退したことを知り、希望を抱いたという。

このコロンバンガラ島も補給が断絶するなか、九月に撤収作戦が実施された。この作戦は、同島の兵力一万二千人をブイン方面に、舟艇約百隻をもって輸送する計画であった。南東方面の海上部隊と航空部隊が支援に当たり、九月二十二日より

十月二日にわたって撤退輸送作戦を完遂したものであった。

これに次いで執筆者の記録するベラベラ島の撤退作戦があった。支援する海軍艦艇部隊は、同島の西方海面において敵巡洋艦及び駆逐艦と十分にあたる激戦の末、敵艦五隻を屠り、敵巡洋艦一隻のみが退避するという戦果を上げ、我が方の損害は駆逐艦一隻に止まり、同島守備隊の岡島部隊と称された五百八十九人がブインに收容された。その中の一人が執筆者であった。

そこでベラベラ隊は解散、原隊に帰り、そこでようやく米の飯を口にする事ができたという。

次いで昭和十八年十一月末、今度はチイセル島に進攻、ここでは敵砲撃等を受けるも損害はなく、昭和十九年を迎えている。しかしこれよりは、食糧の不足、補給の皆無により自活態勢の確立が重要となり、また、栄養失調の隊員が続出、熱帯特有の悪性マラリアで戦病死する隊員も日を追って

増加する状況となり、この頃ようやく自活のための焼畑農園が開墾される。

こうして苦しいブインでの生活と病魔等との戦いが続いていた頃、ブーゲンビル島「タロキナ」方面で第六師団がブイン方面に追い詰められたことから、昭和二十年五月、ブーゲンビル島決戦態勢が決定した。呉七陸戦隊もチイセル島の全部隊も、ブーゲンビル島「ナカロ」地区に農園を確保しながらジャングル内に塹壕を掘り決戦に備えることとなった。

この時の状況を執筆者は『半病人や右手が全然曲がらず小銃を持たない私や兵隊は、敵戦車に対し体当たり攻撃する対戦車攻撃隊編成分隊長となり、渡辺上水ほか元気に農園作業に従事できぬ兵六人が対戦車地雷、あるいは手榴弾を二つ束ね、連日戦車に突撃する訓練を繰り返し行っていた』と実情を記録している。